

(仮称) 市民活動推進条例検討会 第12回 意見まとめ

【検討会の活動の「見える化」について】 事務局（政策創造課）

- ・ 前回条例検討会委員から発案された、検討会の活動の見える化の取り組みについて説明。
（政策創造課との協力）
- ・ 検討会の中で、(仮称) 市民活動推進条例の検討に関する取り組み、意見を外へ向けて多くの人に知ってもらうことは非常に大事であるということが挙がっていた。
- ・ 議事録の公開だけではなく、検討会の活動をもっと多くの方に知ってもらい、それに対してこういう活動はいいね、という反応をもらったり、こういう活動をする面白いななどの意見をもらったりできるような、検討会の活動を「見える化」する仕組みを考えたい。
- ・ 流れとしては、ワークショップ等で、活動を知ってもらうためにどういった風に情報公開や情報共有をしたらいいかについてディスカッション出来たらと思っている。
- ・ そこで出たアイデアを基に簡単な情報共有、サービスのプロトタイプを作り、こういうものだと皆さん（市民）が読んでくれそうだとか、私たちの活動を知ってもらえそうだということをイメージして、今後の検討過程をより多くの市民の人に知ってもらうための仕組みをつくりたい。
- ・ 検討メンバーは、政策創造課、NEC（政策創造課コーポレートフェロー）、検討会の有志の方、地域のつながり推進課でできたらと考えている。
- ・ 具体的にはワークショップやディスカッションを2週間に1回程度を想定している。
- ・ (事務局) このように進めてよいか。→ (検討会) 了承
- ・ 本取り組みについては、今後も検討会で情報を共有していくこととする。

【本日の流れについて】

- ・ 今日**2**つに分けて**2**番目に「指針に対するヒアリング等」と説明があったが、ヒアリングやワークショップが必要だということは前段でも出てきそうなので、ヒアリングやワークショップをやるとなったら、**5**月に指針、条例を決め**9**月に制定となると**2**~**5**月までの間にヒアリングを実施するというイメージでいいか。
- ・ (事務局) そのように考えている。ワークショップの内容によってスケジュール的に厳しいようであれば検討したいが、出来れば**5**月前までに実施したい。
- ・ 指針のたたき台について、各班で考えていくことにしましょう。
- ・ 「指針の基本的な考え方」がこれでいいのか検証しましょう。
- ・ 「市民活動推進の基本的な考え方」、市民側の活動を支援する市民活動推進がある。それに並列して「協働推進の基本的な考え方」、行政側が市民に投げかけるもの。これらのテーマを今は分かれているチームのそれぞれがまとめる。

- ・チームは分かれているが、市民活動を協働でやっている人もいる。行政側から結果的に仕事を回してもらわなければならないので行政側に対することも出てくる。必ずしも片方だけからの内容にはならないというのは少し意識してください。
- ・「定義」は、「市民活動とは」「協働とは」がある。その他にも「定義」がありそうなら、それについても話し合しましょう。
- ・「市民活動・協働の推進施策」ここから具体的な方針に伴って施策を示していく。方針だけ出すのは簡単だが、指針はここで精神的規程を上回るものであったり、こういうことを目指す、方針になるが、議会やNPOセンターに対してのことも出てくるのでどんな施策があるかをある程度並べて、こういうことも必要だという共感も必要になると思う。
- ・出来る、出来ないは別として、ここは皆さんで色々なアイデアを出してもらおう。
- ・すぐやった方がよいこともあるし、理想的でなかなか難しいことでも今後やった方がよいこともあると思うが、それらを挙げていく。
- ・指針たたき台では施策の分けが8項目となっているが、この区分でいいのかどうか。
- ・たたき台の最後に、鎌倉市の「現行施策」「取り組んでいきたい施策」がある。具体的に出ているので、皆さんの意見を色々出してください。
- ・前回までの検討会の意見がたたき台にきちんと落ちてきているかどうか。そうは言ったけど色々欠けているとか、まだ他にもこれがあったということが出てくると思う。
- ・作ってもらったたたき台は少し見にくいですが、丁寧に盛り込まれている。文章のチェックは後でいくらでも出来るので、内容に漏れがないかの確認と、まだ出ていないこと足りないことを補ってください。
- ・この先、実行するのだったら、リサーチやヒアリング、ワークショップが必要だと思うことも引き上げてください。

【協働チームワーク】

- ・1頁の「指針の基本的な考え方」と「市民協働推進の基本的な考え方」に対して意見を出す。3頁の「協働推進の基本的な考え方」、行政側がどうしなければならないかについて考える。このチームのメインは3~9頁。
- ・過去のもの、15年前のものも含めてなので大きめ。
- ・次に「定義」について協働の定義はこれでよいか。
- ・それから10頁からの具体的な推進と施策。このチームでは10頁以降の施策の中は市民が自分達が活動する時のことで、向こうのチームでやることが出ているが、行政側としてどんな準備が必要かという所で充分出ているかの検証が必要だと思う。
- ・aの場は市民。bの財政的支援も市民だが、財政支援を担保するには行政側がどう考えていくが必要かもしれない。cの情報の公開・提供は結構行政側の責任が大きい。市民側への支援と書かれているが、行政側としての情報の流し方も必要。d交流及び連携の推進は市職員の意識を高めると書かれているが、それで十分かどうか。dは長い。

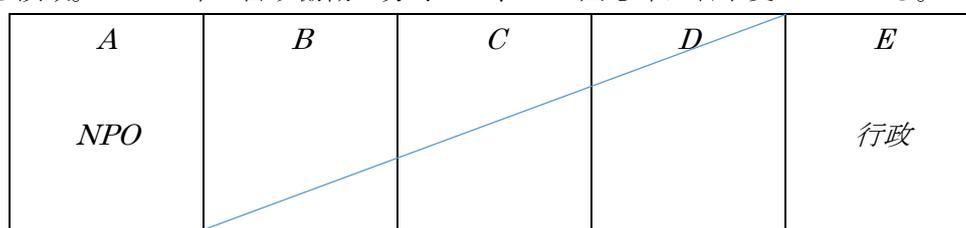
- ・これも焼き直し。人、モノ、金、情報。
- ・ e は活動の啓発及び学習の機会提供。意外とこれは市が担うことか、それかサポートセンターがやること。活動環境の整備は市だから責任が大きい。
- ・ここは基本的には人材。
- ・啓発と機会だから、サイレントマジョリティのことでもあるかもしれないから、これも結構協働かもしれない。
- ・ f は参入機会の提供、これはまさしく市側。 g 市民活動センターは向こう側（市民活動チーム）が大きそう。
- ・ 17 頁 h は共に考えていく場はどういうイメージか分かるか？
- ・ 条例の見直しの機会を作るということ。
- ・ いつもチェックする機会という意味だろうか。
- ・ 「指針の基本的な考え方」について。指針とはどういうものかのイメージは湧きにくいと思う。指針は市の方針なので、市民協働に関してはこういった方針でいくということ。市はこういうことを決断していきますということ。方向性をきちんと示しているということが必要。今こういうことが必要ということや、これを言えてないということなどがあれば出してください。
- ・ 書いてあることでそれがマイナスになることがあれば見直し、必要なことで抜けていることがあれば足していく。
- ・ 条例、指針、具体策となると、条例がふわっとしているから、その分指針に縛りがないと大丈夫か？となる。横須賀市などは、指針は方向性なので「～こういう方向性で行きます」という書き方。極端な言い方だが、指針で市役所が絶対逃げられないようにするとか、市役所は市民の意向を聞いて、市民協働が当たり前という強さを前面に出していくか。
- ・ 今、たたき台は少し柔らかく書いてある。強さを出すのであれば、表現の方法もあるが指針で強さを出していくこともある。
- ・ 条例は柔らかく、指針は硬く、はほぼ決定方針？
- ・ この間の条例を見る限りでは柔らかい。
- ・ だからひっくり返すということはあるのか？
- ・ もちろん有り得るので、提案の中に両方あってよいと思う。
- ・ 両方とも（条例と指針）柔らかくしてしまうと訳が分からなくなってしまうと思う。だからどちらかを硬くする方がよいと思う。皆さんの意見を聞いていると実用性があるもの、やったからには何か変わってほしいという想いが根底にある。だから変わる効果を期待できる形にしなければならないと思う。
- ・ 今の話の中で 1 つの結論としては片方が柔らかければ、片方が硬い。条例を柔らかくするなら指針を硬くする。条例を硬くするなら、指針を柔らかくする。どこかでそういう硬いものを作らないと実際の効果には結びついていかないというのが 1 つの方向性とし

てまとめよう。

- でも条例は出来てしまって、パブコメで意見を取ったら、これでは！という意見もあった。だから今回の指針でビシッとする。
- 指針を作ってみて、これは条例に上げようもよいと思う。その為に時間を取った。
- そういう意味では言いたいことは今回ビシッとやった方がよい。
- 市の職員が市民の中に入っていき機会を作るというのを今の施策として押している。これは画期的なことで、こういう事を義務化している所は他の自治体でない。
- それを徹底してもらって、市職員が市民を怖がらない。市民を味方に付けてもらうようなスピリットを身に付けてもらいたい。そういう機会を実際に持つてもらうことは大切であるということは指針に書いておくと施策としてそれを認めざるを得ない。そういう構図だと思う。
- 市民活動支援の方も指針の方針だからそこを踏まえて、例えば PDCA で馴れ合いになっているものにメスを入れていく。ここのセンターは機能してないのではないかと。なった時にきちんとそこにチェックを入れられるように、指針できちんと言っておく。
- 皆さんが日頃からどうなの？と思っていることをこできちんと言っておく。
- 「全担当課からもれなく機会を出し〜」これは義務化するということか？例えば3つ出さないとしたら3つ出すことを義務化するのか？
- 出されたもの（行政から提案されたこと）をやりたいかどうか分からないから。
- これは一番大事なこと。本当に必要なことなら皆やりたいはず。でも現場は出されたものがやりたいかどうかは別。やりたいことが決まってもそこに至る事業モデル、やり方が確立しているかどうか現場によってあると思う。そこをどう動かしていくか。やりたいと思ってもそこに至る事業モデルが出来ていなければどうしていいのかわからない。それがノウハウの問題だけなのか、事業モデルがまだ設定されていないだけなのか、現場で回していくには様々ことが考えられる。ただここでやろうとしているのは、そういうものを見つけにいこうよ、ということが共通のビジョンとして一緒に向かっていくような姿勢にならないと。
- ここではモデルを作ることを義務化すると、実現するために1歩ずつお互いに踏み出していこうとすることを義務化するのが1つあるかと思う。
- どうでもよいことを3つ出されても仕方がないのに3つ出したと言われても困る。自分がやりたいと思うことは大抵、鎌倉市ではやったことがないけど、他市では当たり前に行っていることだったりする。鎌倉市と一緒にやっっていこうとする中で想いはあるけど、スキルがないというのがいつものパターン。同じようなことを市でやるのは面白くないから私たちがやりたいと言ってもその提案を聞き入れるだけの予算がなければ、人もいないと言った時、例えば枠が30万円のものを言っているのではなく、この事業なら予算を一から検討する余地があるというようなシステムを作りたいと思う。市民活動はやる気でやるもの、与えられたものでは力が出せないかと思う。

- ・行政側もこれはやってもよいとか、絶対やらなければならないことなど、向こう側での言い分の度合みたいなのを最初に出させる。例えばやる気度をA、B、Cなどで決めておいて、Cならば皆から要望が上がってきたならやる、Aは絶対やらなければいけないなど、向こう側の出し方にルールを決め、それに応じて市民グループも対応できるようにする。
- ・市民側も受注しやすいような体制にしておくことも重要。
- ・今の話は具体的な施策のcのオープンデータ化やdの交流と連携、fの参入の機会に該当しそう。
- ・ここに（指針の基本的な考え方に）載せるか、具体策に載せるかになると思う。ここに載せるならもう少し広くするか表現上の違いがあると思う。
- ・基本的な考え方なのでディテールでもよい。こういうことが載っていないということを挙げてくれればいい。基本的にはもう少し行政と市民のやりたいことの情報共有が出来ている必要がある。そういう方向を示せるようにする。
- ・今ここで話し合うのは上の2つだと思う。オリジナルはどちらかという話し合っている中で出てくるもの。わざわざ探すものではないかと思う。
- ・4番目は、どちらかという総括的な話でテイストが違うので、今は上の2つをどう浮き立たせていくか。
- ・具体策が出た所で、具体策を束ねた方針があるということでここにまた戻るのかもしれないと思う。
- ・「協働推進の基本的な考え方」について。行政側が市民に対して、協働でいきたいと思いますということで色んなことを動かしていく。市民が協働でやりたいことをどう反映するかも含める。
- ・残しておいてマイナスになるものは外すが、載せるかどうかについては考え方もあるので取り敢えず残すようにする。多分欠けていることが問題。あと重複していることもある。
- ・「公共サービスやまちづくりなど自治体による一元管理実行システムへの限界を迎える時代にあって、投票行動だけに依存しない自治への参画機会が求められている中で、市民の直接的な参画の機会が求められる世界的動向がある」はどういう意味なのか？どこから引っ張ってきたもの？ここだけすごく浮いているような気がする。
- ・横須賀に書いてあったものではないか？議員を選んで陳情させてという昔のやり方ではなく、直接できることはやったらよいという。
- ・10年前には必要だったが、今は要らないことではないか。
- ・これがどうなのか？
- ・読んでいてこれはどうなの？と思った箇所。
- ・逆にこれは必要かどうか、書き方を変えるのか、どう思っているのか？時代に応じた表現に変えるという方法もあるし、ツールを別に用意するというものもある。

- ・削って行ってここから減らしてしまうという手法はいいのではないかと思う。そうするとシンプルになるから、言いたいことが見えてくる。量が多いことも確かに大事だが、量が多いと何が言いたいが見えない。だからこれは無くてもいいかなと思う。ポイントをいくつか絞ってやっていくというのも1つの方法。
- ・ただ、今この整理をここでやった時に責任を持って漏れがないと言い切れない。それが怖いと思う。絶対的に間違っていること、言っておかなければならないことに絞って書いて、文章の整合を事務局にお願いできればと思っている。
- ・私たちが検証して減らしてしまうと大事な所が抜けてしまわないかと思ってしまう。
- ・6頁の図でNPOが独自でやることと、行政がやることでAとEの真ん中のC対等で協力する領域。ここが今で言う協働の分野だが、この図も今は若干変わっている。



- ・横須賀は市民協働と市民活動支援を分けて、Cを含めて行政側がやることとしてC、Dを協働と名付けて、B、Cを市民活動支援としている。
- ・こうやってきちんと分けないと行政側がきちんと考えなくなったり、市民から出てきたからやるというスタンスになってはいけないと思ったから。
- ・市民協働はDの部分がとても大事。行政側がどうやって市民に落としていくかということをしっかりさせないといけない。Bは出来る、市民グループがこれはやりたいということならば率先して進めてくれる。Cは協働で両方が対等で出来る、これも結構難しいが、お互いどれだけ譲り合ってよい形で提案出来るかということがポイント。Dは積極的に行政が出していこうというのは、なかなか難しい。だからこそこのDの部分をしっかり強化していきたい。それが出来ているのが鯖江だと思う。Dの部分がしっかり出来ると活気付いて、出されたことに食い付いていく市民グループが育つのだと思う。
- ・そういう意味ですか。私は逆に行政がほとんど牛耳ってしまい、市民にこれをやりなさいと言ったことだけをやるのだと思っていた。
- ・解釈的にはそうですね。
- ・行政側が頑なのはEなのかと思う。行政側が自分達の責任で頑なにやらなければと思うのを少しでもこちらに（市民側）流せないのかとは思っている。
- ・結構今もあると思う。もう少し対等で出来るということを市民が主張することが今回のイメージかと思う。
- ・多分最初に出来たときのイメージはそうだと思う。今はそうではない。分類がもっと進んできている。当時はパブコメも無かった。まさに言われたことをやるだけだった。今はパブコメも有る。制度自体が変わってきた。

- ・でもまだ積極的とは言えない。だからこのテーマ。
- ・市民が強調しすぎると市は引いて、市民にお任せになってしまう。そのの所を市にしっかり責任を持ってやりなさいというのも有りか？
- ・お任せぐらい投げられればよいが、そんなこともできない。
- ・(市に) そんな度胸はない。まずは市民に出してもらい、市民がやってみて、市民でもこれくらい出来るということに担当者が慣れるということが大事。まずはそこで免疫を付けてもらい、段々とズレ（移行し）ていく。
- ・そう考えるとやはり双方向なのだと思う。担当者レベルでいうとこういう所で大丈夫なのか？という不安もある中で、NPOセンターを中心としてNPO側がきちんと育てているので大丈夫であるという保証をしてあげて出してくることが必要になる。双方向で出し合いながらマッチングしていくことになると思う。
- ・今 NPO センターを含めて鎌倉の市民グループがどれくらいいて、どのくらいの実力を持ったどのようなグループがいるのかを課でも認識していない状態だから、全然情報が取れていない状態で、いきなり市側に市民グループが私たちを使ってとか、私たちがやります、と言ってもどうなのかなと思う。市民グループはしっかりやれる人達を育て、出していく。市側は市民に任せてもよい仕事を選んで出していくべき。双方向出しのシステムが出来れば意外と難しくないのかという気はする。今はどちらもにらみ合いなので、何も出来ていない。
- ・言葉尻、単語の使い方の話だが、「世界的動向がある」は受動的。世界的にそうだからやりましょう、というテイストの文章を入れたがっているが、どちらかという世界モデル的ケースになって行く方が絶対によいと思う。なので「世界的モデルケースになっていく」がよい。取っ掛かりは鯖江が成功しているからというのでもいいが、それを超えたものを作っていきたい。
- ・NPO センターを立ち上げる時に、市側が作ったものと市民側で作ったものがあり、こちらは箱（建物）のことしか書いていない、こちらは中身が書いてある。その時に運営方法の議論になった。市民が運営する時にやったことがないから出来ないという同じような議論になった。どうして溝を埋めたかという1ヶ月実験をやった。1ヶ月実験をするというのは、どうしたら溝が埋まるかという話し合いを重ねていった中で、互いに出ることでまず両方ともが納得できることは何だろうかとやった中で、1ヶ月やってみて出来るという反面、あれもこれもやる必要はなく、もっと軽くしても良かったのではないかという意見も市民側から出た。そういう意味では次の段階に乗るような話し合いをするというのが1つあるかと思う。
- ・例えば NPO に委託を任せると、100%オールマイティである必要はなく、基本的にはその仕事がきちんとやり遂げられるかどうか1つある。そこが力量を持っているかどうかを何でもって互いに納得できるようにするのが、次の話し合いになる。そういう段階を踏んでいく必要があるのではないか。それがここで言う“協働の次のステージに上

がっていく”ための部分なのかと思う。

- ・あの時は行政側も忍耐に忍耐を重ねて育ててきたし、こっちも育ててきたので、いきなりこの事業が出来る団体に育てていけるわけではない。この事業をやりたいと言った時にそこに至るまでにやる気のある人は、集まって議論を重ねていき、出来た例が NPO センターの最初。
- ・具体的に言うと NPO センターは夜 8 時まで当番が居て開けるということだったが、それは出来ないという話があり、でも利用者があると開けないと、ということで実験を試みたら、夜 8 時に人は来ない、団体も使わない、だから人は必要ないという 1 つの結論が出て昼間だけにしようとなり、昼間だけなら出来るのではないかということで互いに納得した。そこに至るまでに何度も何度も実験をしたり、話し合ったりした。そこで自分たちも出来ると思うし、それならば通常の行政管理の中でお任せ出来る範囲であるということで接点が見つかった。多分 1 つのスタンダードだけでいってしまうとなかなか難しい部分がある。市民側でこうしたいからとハードルを上げてしまうと難しくなる。やってみて互いに納得できる所に落ち着いた。話し合いを出来るステージを作ることがここでやっていく部分。
- ・双方ゼロから。
- ・今聞いても、今も何も変わってないように思う。
- ・それ以降何の施策も打ってないのだから仕方がない。だから NPO センターは使える団体を育てようとしているかどうか分からない。行政側ももう懲りたと。
- ・発足当時のことだけ。
- ・市民が運営するとなっているが、元々は職員がいないと運営させないと言っていた。
- ・市民がやりますだけでなく、必ずそれを評価する第三者とセットになってやる必要がある。失敗するのが怖いからやってもらえないということがある。
- ・信頼関係の構築が必要。
- ・信頼できる情報をきちんと評価する。
- ・指針に何か分かりやすいキャッチコピーが入ってくるとよいと思う。
- ・それは指針の形の所。
- ・最初にこれを作った時には新しい信頼関係の構築、新しい信頼関係を始めましょうと。単純に契約書を交わしただけではなく、次のステージに上がる為の新しい信頼関係を構築しましょうというのをサブタイトルにしたいと思う。
- ・そういうのが見えてくると次に何をしようとしているかが、見えてくると思う。
- ・鯖江（市民主役事業化制度）を読んでいて、市側の事業として市民が担えるものはどういう種類のものがあるのかをみた時、例えば成人式の会を人生の先輩市民が、後輩たちはこういうのをやりたいだろうからやらせてあげよう考えてくれるとすごくよい式だと思ふ。でも市民が市の事業を正しく理解しているかということ結構疑問がある。市の仕事の理解を市民がする、そういう情報の開示の仕方。市が積極的にやっているようには見

えないので、そこからかという気がしている。それがきちんと出来れば、市民提案型事業は出てくると思う。

- ・市民提案型事業を横須賀市でもするが、市がどんな仕事をしているのか、そこにこういう風に参入すると市民側でも出来そうというのが見えない。そこまでの情報が全然ないので、市民側がこれをやってみたいと言った時にも出来るかどうか分からない。
- ・総合計画の中でそういうことをやっているのでタイムリーだというようなことを、あの膨大な市の計画の中で見つけて引き出してくるというのは難しいだろうと思う。
- ・やりたいこと、やってみたいこと、やって欲しいことのマッチングは、もう少し交流しないと出来ない感じがする。
- ・バリエーション豊かではほんの少しのこと、イベントを1つやる、2つやるから始まって、事業的なものなど色々あるものに少しでも関わることで立場が違ってくる。市側の立場に立つということも意外と大事なこと。そうするとこういう資料もよく見ようとするようになる。
- ・小さい事業をお手伝いしたことにより、この人たちにはお願いできるというようになり、信頼関係で大きい仕事をしていくことになる。そういう成長もある。
- ・横須賀市で補助金の応募規定で3年、4年と応募してくる団体は本当に頑張っていることが見えてくる。それは評価だと思う。このグループでもNPOや市民グループをどう評価して育てていくかの話が出ていた。市側がその評価に積極的に臨んでいく姿も欲しいかも。
- ・書面にしたから今イメージしているように動けるというのものではない。
- ・市側としてはこの市民グループは頑張っているが、任せてよいかの評価とは少し違うのでそれは双方向からだと思う。最初の入り口として市の仕事を市民はきちんと分かっている気がする。
- ・そこは誰も否定しないと思う。それは特に問題ないと思う。
- ・市民側が食い付けそうな書き方があると思う。
- ・横浜市は補助金をたくさん出している。補助金を取るのが上手い団体があり、プレゼンが非常に上手でどうすればそのプレゼンで補助金をもらえるかのツボを心得ていて出してくる所もあると聞く。
- ・それはプレゼンでしか評価出来ていないからそういうことになる。
- ・まさにそういう所がある。
- ・どう評価するかを資料をきちんと作りましょうということになる。
- ・評価の仕組みは大事。
- ・これは全体的にNPOを対象にしているたたき台になっている。
- ・当時はそうだった。当時はNPOと行政だけだった。
- ・今は任意団体でもよいのではないかという話になっている。
- ・ここで言っている団体はNPOと任意団体も含めて。

- ・これは NPO 法人が出来る前？→NPO 法人が出来た後。
- ・でもこれは法人化を意識していない。
- ・当時は法人化している団体は1桁くらいしかいなかった。
- ・これは認定 NPO だけではない。
- ・イメージは任意団体。当時は法人を取るのに3ヶ月から半年はかかった。
- ・いわゆる市民団体を NPO と呼んでいたということ？→そうです。
- ・それは聞かないと分からないこと。それは市役所の職員でもそう思うと思う。NPO の認定が取れている所ならば任せてもと思うが、普通の市民グループには絶対無理だろうという考えになってしまうことはあると思う。でも決してそうではなくきちんと実績を積んでいることが大事。
- ・ここに至る前の導入という意味では今の話はよいと思う。少しずつやっていかないと分からないから。
- ・NPO センターをやる時には有力な団体が20も集まってやっているわけだから、そうではなくて、たった1つのこの団体がどうなのかというお互いに疑心暗鬼の所でのことから、まずは試しに色んなことをやってみて。
- ・企画は今でも結構やっているという話でだが、町内会に任せたり小さいことでも任せてやっていることはあると思うが、それを追認するだけで市民協働になり得るか？
- ・それとあまり全体を網羅できていないという実態も、もったいない話。市役所は市民協働は無理だと言っているが、既にその課では任せているのだから出来ているのではないかと思う。ただそこは単純な委託と市民の提案を受け入れて協働感を出していけるかというのが別にあるが、横須賀市でもリストを出させると既にやっていることも出てきた。だからこれの延長線上に進めていけば、思っている以上に市民協働は進んでいると言えると思う。
- ・現状で市民に任せていたり、頼んだりしていることはいっぱいある。レベルは色々あるけれど協働事業はたくさんある。最初の一步として小さいことをやっていき、段々成長するというやり方もあると思う。
- ・既にある委託事業の大小を全部出させて、そのメリットやデメリット、どういう経緯でその団体を見つけたとか、そういう実績データを出していくことが必要。課によるとそういうことでいいの？と思う所もあると思う。そこから市民に任せられる事業を増やしていくのと、市民側は使える団体を育てていくという両方を膨らませていくと結構マッチングしていけるかもしれない。
- ・委託事業はそんなに簡単ではないのか？
- ・広町の公園は指定管理を出しているのではないか？
- ・広町は公園協会。公園協会がそのこの団体と一緒に指定管理をやっている。
- ・あれは大きな事業だけれど、そうではなく小さな事業からスタートしたらよいのではないか。イベント1本やるだけでも分かる。

- ・ 私たちも昔イベントを1本一緒にやったが、それだけで分かるし、きちんと評価してくれた。
- ・ 行政は評価してくれても結局お金が付かない。よいと分かっているけど他との兼ね合いがあったりする。そこに第三者の評価が入ると他の活かし方があるのではないかと、このお金は出せないが、もう1本だけやって実績を出してくれないかとか、切ってしまう方法もあると思う。「今は予算がないから」で終わりにになってしまう。
- ・ 今は育てようという中の1つとして、それで切らないで何度か活かしていく。
- ・ 普通の行政の中の事業で、予算申請しても普通に切られてしまう。そういう意味では市民協働自体に行政の仕事自体がひんしゅくになってしまっている。
- ・ 今、取捨選択の仕方が本当によいのかという所がある。だからオープンにして他の人が入った中で、当事者同士でする話は違うのかと思う。
- ・ 今相互提案協働事業で予算が出て30万円で何本かやっているが、その中でこの団体は使えるとか、ぜひ伸ばしていきたいとか、そういったことが出来てきたら他の方が伸ばすということにしていけばよいのだろう。1年だけで切れてしまうというのが問題。
- ・ 相互提案でも最初は地域のつながり推進課で予算を取るけれど、その後続けていくのに各担当課で予算を取って続けていく所もある。
- ・ このテーマでないことでもこの団体は出来るのではないかと見通すことが出来ると、全く別なものをこの団体に投げることも出来るのではないか。でもそういうことの土台として、職員がもっと中に入ってくる必要がある。
- ・ 人材はすごく大切。それも育てることの中の1つに入っているのかも知れない。
- ・ 鯖江の事業を見ても実際単発のイベント、事業が多い。だから多分市がやっている事業の中で引き継いでやっていることが多い。
- ・ そこから成長してパートナーとして強化してやってくると大きな事業でも任せられるようになる。
- ・ 協働推進部会で市の提案で最初にあったのは、「この提案ならあの有名な団体が」とそういうのだけを並べられて、そういう人が今までのご褒美みたいに貰って終わりというのが見え見えだった。それでは育たない。もう古くてご褒美をもらう団体ではなく、新しく出来た団体とやっていかなければならないのというのがあった。
- ・ 出す側も安心して任せられる。
- ・ 出さなければいけないということでそうだったみたい。そういう時代は終わり。
- ・ 市側の立場に立つと安定してよい答えを出してくれているという所への信頼性でもあるから、随契約的なものとコンペ的に戦わせて競い合うことがあってもいいのかと思う。それもいくつかパターンがあると思う。色んな入り方を公共化していくことも大事。でも初めて出来た所を簡単にあしらえるようにはしたくない。
- ・ 団体の成長ぶりが見える仕掛けが必要。
- ・ NPOのデータ化、見える化という話があったが、ある団体がこのような活動を何度も

して、市民も集められるし、市の事業もこれくらいやり、市民の信頼もありなどの評価をし、その評価で成長ぶりが見えるのもよい。

- ・団体という区切りでよいのか？と思っている。結局人だと思う。1週間でも出来る人が集まっているのなら出来る。投資のベンチャーの話でいうと1回できた団体なら出来たばかりの団体であっても投資は集まる。団体ベースだと人が動いた時にまた変わってしまうことがある。やはり個人でみていかないといけない。
- ・どこまで出来るかという話は、NPOセンターがすればよいと思う。市が全部の人に会うということは無理なので、あの人はすごく仕事ができるなど、この人はちょっとなど、そういうことが詳しい人が仲介役で居てくれればよい。
- ・そういう風になってくると、その人がいなくなると出来ないということにならないか。
- ・個人に拠らない属人化しないということ。データベース化するなり、皆で持ち合う。一人にやらせない。
- ・協働として長く続けようこの表で考えていたことなので、継続性が大切。
- ・でも今言われたことも入れるとなるとそれは向こう（市民活動チーム）の領域かなと思う。
- ・これは本当に幅広く可能性を考えておかないといざ動き出した時にキーパーソンが抜けた場合にあらあらとなってしまうことにもなりかねない。
- ・今回指定管理の問題で団体が障害に遭っているのは、その担当課に5年後、10年後どうなっているかのビジョンがない。国からの色々なことに翻弄されて、とにかく何かやらなければとなってやっている状態があるように思う。それは行政として仕方がないこと。今子どもへの施策は揺れているから、国から今年これをやりなさいと、次3年後にすることが見えないというのはあるかも知れないが、もう少しその課としてのビジョンを国から何と言われようと、「うちはこうやる」といったような姿勢がないのが一番の元凶だと思う。
- ・その余地を持たせない財政、企画。担当課が持ってもそうならない現状があるのは話をしていくとよくわかる。
- ・事情はよくわかるが、やりたいことへの余地というのは常に担当課に1つはを持たせないと担当者のやる気がなくなってしまう。言われたことをやっていけばよいということになってしまう。
- ・育てることへの評価も出ているが、必要だと思う。
- ・あれほど揺れ動いている課だと思い切って外に出せないと思う。出しても国は来年こんなことを言ってきたらどうしようとなり困ってしまうことはあると思う。それはどうすればいいのだろうか。
- ・課をまたいだルールとして1つ置いておく必要がある。予算を取っておいてこういうことが出てきた時に対応できるものは作っておくべきだと思う。そうしないと絶対に無理。評価をしてきていないわけではない。けどお金がない。

- ・やりたいのは山々だけど、予算、お金がない。
- ・NPOと付き合いからにはそれに振り回されない行政の立場も少し入れてほしい。
- ・やりたくてもやれない現状があるのだと、本当にそう思う。
- ・市民に投げるのを恐がってしまう。
- ・お金がありどうにか市が続けておいてくれれば、もしかしたら予算が付いたその時あげられるかもという所にしか任せられない。
- ・1年後でもよいと言ってくれる所の方が楽でもある。
- ・前回は休んでいるので経緯が分りにくいのですが、前に条例案が出てきてそれをパブコメにかけて、あの条例は一度置いておいて、改めてこういうことでスタートしようということになったのか？
- ・あの条例は市民の言葉で、これからあるべき市民協働や市民活動支援をどういう風に形作っていくかということで条文にしたが、多くの意見の中に抽象的な精神論の過ぎて具体性がまるでないというのがあり、具体化を考えてないわけではないけれど、表現する時に条例に対して実際どういう方向性でいくのかという方針、その方針に基づいてこんな具体策を用意している、という具体的な施策の3つが最終的に必要。地域のつながり推進課としては、これを考えて来年度方針と施策を考えていこうとしていたが、セットで見せないと当然誰も納得しないよということで、先にその条例に基づいてどんなことをやっていくのかという基本的な方針、方向性、それと具体的な施策をセットで見せられるようにしないと私たちも条例がそれでよいかどうか分からない。もしかしたら、検討をした結果方針がガチガチで出来たら、その内容をそのまま条例に持っていった方がよいという話になるか、それとも今の条例の柔らかい感じがよいから、方針をきちんと見せていくことでそれをカバーしていくか、そのどちらにいくかというところで施策を出してやってみようとなり、前回からこういうことが出てきた。
- ・それで方針に対しては、横須賀市の例があり、過去の資料の中でヒントになることが色々出ている。また1年間の検討の中で皆さんからいろいろと方針も出ているので、整理してもらったのがこのたたき台。重複することもたくさん書いてあるが、事務局で整理してもらって見えてくるものがあるので、今方向性として欠けているものがないかなどを見ている状態です。
- ・これを基に文章を考えようということ？
- ・重複されていたものが整理されて方針が文章になり、あの条例に対してこういう方針も用意されているということを示して、再度パブコメにかけて、それならば、ということになり合意にたどり着くという見込みです。
- ・その時に方針、具体的な施策が見えてそこからフィードバックして条例を振り返れるかは先の判断。
- ・確かに全部を見せないとなあの条例だけでは納得しがたい部分はある。
- ・地域で皆を支えていくことの方が行政の施策であり事業なのに、それを代わりにやって

いる団体もすごくあるはず。防災などもそう。

- ・それに対して、協働は市側が市民に対してこういう事業を一緒にやろうとか、委託したり、色々協力してもらったり、意見交換したり、幅広いことが必要だと思うが、行政が聞いてくれないとか、動いてくれないということがあったら、今方針として網羅しているかを考えてもらいたい。
- ・実際行政は協力的か？
- ・私はそう感じている。どんどん飛び込んでいるのでコミュニケーションも上手くいっているような気がする。
- ・今泉台のグループは任意のグループとして成立しているのか？町内会から発生したのか？
- ・元は町内会。NPOの有志で立ち上げた。
- ・そのことを市側は知っている。町内会から派生して長期的に見ようとしている団体は信頼度も高いかと思う。
- ・私が見た限り政策創造課が、今泉台の所で官、民、学、事業者の4者で1つのモデルをやりたいということがあり、その仕掛けの中で出たNPOなのでとても理想的に出来た。だから行政が育てようと思っているところという風に来るというモデル。
- ・それを事業として市側が託してみようということ企画として持っていることが大事ではないか。逆に政策創造課はどうしてそういうことを思ったのかを聞いてみたい。
- ・行政だけでは個別の地域の隅々まで出来ないから、地域でそれぞれ解決してもらおう策はないかということから考えられて、学校や地域を巻き込みながら一緒にやることを考えたわけでしょう。同じことが七里ガ浜や梶原も当然起きうるし、その為には七里ガ浜でも人材を掘る必要があるとなったら、これを継続する必要がある。
- ・地域格差があるという理論には簡単になる。
- ・防災ならば全市が必要となる。それも教育や福祉など色んなテーマである。その時に市民に投げていくこともある。それを政策創造課だけが持ち得たのは何故か？
- ・政策創造課が3年間も掛けて、こちらにお金は降りなかったが、市役所の人たちがあそこに全力投球したものを七里ガ浜や梶原に同時に出来る訳がない。
- ・後はやりなさいと言われたら、出来ないでしょう。あれだけ行政が関わり、途中で発表会までやり、色んな人を呼んでディスカッションをやり、発表をしたりして。
- ・政策創造課はどうしたいのでしょうか？同じようなケースとして他地域に展開していくつもりなのか、取り敢えず一つの地域でやっただけなのか。
- ・モデルは作ったけれど、同じように行政が関わるということはそれだけの予算投入出来ない。
- ・今泉台の取り組みは、現在は地域のつながり推進課の事業となっている。今それを元に他の同じような地域にも展開しようとしている。今年度は交流会の開催を行ったりしている。

- ・すごいノウハウがあるわけだから、今泉台での進め方。政策創造課で持っている作戦、今まで経験してきたこういう形で地域の人たちを拾い上げて、どういう交渉をしながら、学校、大学を絡ませるのかといノウハウは地域のつながり推進課におりているのか？
- ・おりてきている。
- ・他地域に私たち（NPO）が経験談としてお話しに行くことは、努めてやることにしている。それがないと意味がない。
- ・それを普及させることでやっと思意がある。
- ・そこまでしたら市側も重い腰を上げる。地域のつながり推進課は大変だけれども、そこに予算がおりているのは保証の限りではない？それとも付いている？
- ・地域のつながり推進課で重点事業になっている。
- ・役所で一番お金が掛かるのは人件費。正直な話、NPOでは100万円もお金をかけてやるというより如何に職員が一緒になってやれるかという所が結構ある。市役所全体の経営からなると、そこには職員1人の人件費を投入することになる。そうするとマンパワーがどれだけあるかに響いてくる。
- ・方向的には市役所の職員がやったノウハウを今泉台の誰かに渡して、その人が行く方がよいのではないかと思う。同じことを市役所内の他の部署でするならまた市役所のお金を使わなければいけないわけだから。
- ・せっかく出来たノウハウを市の職員が使わないで、他の地域で出来るようにして初めて今泉台がそうなったことの意義が出来る。
- ・今の話から、協働はやった仕事の先に誰かに提供するというのが必ずある。それはどんな分野であれ。そこに対しては常に100点を求められていて、その人に100点の公共サービスを提供するために一緒になってやりましょう。
- ・その時に先ほどの話であったように育ちきった団体に投げるのが役所のやり方と、それはある意味100点のサービスをするには安心。ところが先ほどの話の中で発展途上のNPOを育てていく目線がないと将来的にダメなのではないのかということであったが、単純に育てるという仕組みをそこに入れ込んでいかなければならない。それはこの中に書いていない。なのでそこをきちんと表明していかないと駄目なのかと思う。
- ・「育てる」話はいっぱい出ているけれど、ここにはっきりとは出ていない。
- ・今日の話はほとんど「育てる」話。
- ・「育てる」目線を政策創造課の話を3年間つきっきりでやり、しっかりとしたNPO法人となり今活躍されている。他地域に展開する時に「育てる」仕組みは職員がやるのか、NPOがやるのかがあるにしても、「育てる」というキーポイントがそこにないとあちらこちらで協働は進んでいかないというのは1つあると思う。
- ・お金の報告をする、オープンに報告する、それに対する評価をする、評価された所は必ず人材を育成するまでがワンパッケージ。そうすると責任を持って継続的に仕事をするようになると思う。役所に報告書を出しておいて、きっと忙しいから読まないというよ

うな報告書では何の意味もない。

- ・今泉台は何回かシンポジウムをやったが、皆さんにどの程度周知されていたか。
- ・HPでは出していた。関心がある人しか見ない。
- ・行ってみたらすごかったということ。どんな内容か予め分からないから人を誘えなかったが、行ってみたらすごく良かった。中でも市の職員の担当者の内容の濃かったこと。職員の発表であれだけ濃い内容だったのはびっくりした。
- ・そういうものは動画など議会のようにフルで流せるのか？そうすると行ってない人も見られるから、実際生でどんな話があったのか、議事録を見るのと生で見ると臨場感が違う。これを見ていいねとなれば、更に広まるきっかけになる。
- ・NPOを育てるといのがあまりピンと来ていない。何をもって育てるといのかという所が分からない。私は基本的に市民活動は出来る人が出来ることをやればよいという考え方なので、出来ない所は出来ないで手を挙げなければよいと思う。人を育てるとい土壤を作っていくこともあると思う。特定のNPOをある程度出来るように育てていくというのは行政の仕事ではないと私は思っている。「育てる」ことの定義をもう少しはっきりしてほしいと思う。
- ・やりたいことは決まってもそこまでの道筋が見えないとか、その事業レベルがないという時に成功している所からそのノウハウを伝達してもらうことは効果としては有りだと思う。それが行政の仕事かどうかとなると少し違う。
- ・それはNPOセンターの仕事だと思う。行政にはそんな時間はない。だけど行政としてはこういう事業をした、こういうグループがいると助かる、実績を評価していくようなことをして育てるきっかけを出していくことまでを義務化するということだと思う。
- ・この部分は協働なので、C、Dの部分は半分行政の役割ということなので、絶対タッグを組んでいかなければならない。私の例でいうと公共の領域の中で活動をするから私たちはどうしても行政とタッグを組まなければならないが、最初の10年はものすごく大変だった。でもその間にどうやったら行政とうまくやっていけるかは自分で学んでいるから、ほとんど行政の世話になってない。自分で学んでいる。その後今のような制度になるのか、最初の冷たい10年で学んで次の10年に活かしてきたから、私の元々の考えでは自分で育たなければいけないと思うけれど、どこもかしこもそうではないので私は成功談も失敗談も色んな所で話している。
- ・成功した所とこれから成功させようとしている所が結びついてノウハウを受け継がれる仕組みが必要。
- ・成功事例すら分からない。
- ・今泉台の事業のような成功事例は全市民が知ってないと、自分の街でも一緒だという声が出ないといけない。そういう風に攻めてない。それは行政の責任でもあると思う。行政は事業として税金掛けてやっているのに今泉台で良い例が出来たというのを役所の人も知らなければいけない。

- ・情報提供の在り方だと思う。
- ・当然そこだと思う。
- ・情報を取りに行かないといけないでは駄目。
- ・結局イメージーションの問題。自分がこうして欲しい、でも相手はこういう風に考えているのではないかと考えておかなければならない。行政にもそれをお願いしたいけれど。
- ・互いにそういう意識を持たなければいけない、そういう意識でいかないとマッチングしていけないということがポイント。
- ・今の話を踏まえて、これから調査をしていく、ワークショップの検討が必要であるか、否やについて。先ほどの政策創造課の取り組みはどんな風にして動いてきたのか聞きたい。
政策創造課のこれは今後人口減少が起きる中で市民がどう自立していくかの事業か？それともたまたま今泉台から出てきて話なのか？
- ・行政側の施策としての今後の地方自治。
- ・上手くいっているのか、あまり分からない。具体的に何がどう凄いのか？
- ・一般的な感覚で、何が凄いというより、凄いことが何なのかという情報を共有しなければいけないと思う。
- ・知っている人は知っているが、全般的には知られていない。
- ・4者がという所が、今までと違って新しい。
- ・連携を取れる仕組みが今泉台は出来ているということ？
- ・その仕組み作りを政策創造課でしたということ。事業者と大学とを同じ割合で行った。
- ・まちの発展のためには、企業を巻き込むことが今後大切になってくるのではないかと思う。当然大学は大学でやって。4者というのがポイント。
- ・委託の情報が欲しい。前回委託事業の一覧が出たけれど委託で出しているが、もっと謝礼レベルで市民の皆さんが関わっていける例はたくさんあるはずなので、それを出してもらおうといいと思う。
- ・先日の参考資料は鯖江の事業に対比させたものを一覧にしているので、鎌倉全体のものを出してもらいたい。市が団体、市民、事業者に任せたもの一覧。
- ・関わり方がどうなっているのか知りたい。
- ・お金に関わらないものもあると思う。イベント的なものもある。
- ・市民協働の形で既に鎌倉で実績のあるものをリスト化したい。幅広く捉えると委託は本当は協働ではない。委託はお金を出してこちらが委託した作業だけをやってもらうこと。鯖江はそれを避ける為にも委託をかける所でも一応市民側から提案も混ぜてそれを評価しながら、委託している。それもかなりポーズっぽいが、市民が任されるだけではない形を作ろうとしているのが鯖江。
- ・イベントもお金を出さずだが、交通費くらいはきちんと出すようにするなど協働の形を

すごく簡単な協働から、すごく大変な協働まで、色んなランクの協働の形があってよいと思う。またそういう幅が取れるかだと思う。

- ・最初は小さい協働から始め、段々と大きなものを任せられるようになるのも、そこで間接的に育てるということに繋がるのではないか。そう思うとどれくらい現状では任せているのか知りたい。
- ・初動の苦勞をしりたい。最初からあれだけの提案を投げられる訳がないから。
- ・応募してきたものをそのまま鵜呑みで出来るというのは、不思議だと思っていたので。
- ・最初の年に各課に市民に任せてもよい事業を出してと言った時に、すぐに出る訳がないだろうし、その時の実情が知りたい。
- ・鯖江ではどういう風に軌道に乗せていったかが、知りたい。
- ・それと初動の部分の苦勞を知りたい。それをヒアリングに行きたい。
- ・鯖江はまとまらなければいけないきっかけがあった。
- ・国際大会のホスト役を国ごとに地域別に任せたというのがきっかけで、市民が分担してやり市民の意識が高まったということ。
- ・それは行政もどうしようと悩み、市民もどうしようと悩み、その結果一緒にやりましょうということになったのだと思う。
- ・それで任せられるとなればよいと思う。でもそこで行政が出せたことが不思議で仕方がない。
- ・やはりそれが高まりだと思う。私たち鎌倉には何に高まりがあるのか？と思うと何か冷たい感じがする。
- ・鎌倉はうるさい市民しかいないのに任せられる訳がないと私などは思ってしまう。
- ・鯖江のような危機感も切迫感も何もないからなぜ今のタイミングなのかと思う。
- ・防災面で、例えば津波などの災害を予想して備えるでもよいと思う。
- ・鎌倉でも毎年防災イベントをやっている団体がある。津波が来て、ゼロになっても、そこからいいまちをつくっていくための仕組みも大事だと思う。
- ・東北の支援で行った町でも、こういう言い方は良くないがせつかくここでゼロになったのだから、今までいろいろなことを言っていたがこれで新しいまちがつかれると言っていた。その時は震災が起こった数か月後にそんなことを思うのだと思ったものだが、そういう時に後ろを向かずに今出来ることに向かうというのは非常に大事なことだと思う。
- ・防災はやはりテーマとして自分事になる。自分の命の問題だから。そうすると市民も必死に考えるし、行政もそう。
- ・あとヒアリングとかについてあるか？
- ・それぞれの部署がそういうことを呑めるのかもあるということを知りたい。
- ・協働をやる気があるのか、各課長、係長に聞きたい。
- ・ないから、これをやっている。
- ・わかりませんよ。やる気はあるけれどやり方が分からないということもあると思う。

- ・ 掲示板みたいなものを、自由に発言できるものを作ればよいのではないかな？ でも個別にそういう所に投稿しない人の意見もすくいと上げていかないといけない。
- ・ 各担当の人はやりたいけれど、上司がね・・・という場合もあるかも知れない。
- ・ 毎回違う課に検討会に来てもらって話を聞くというヒアリングのもよいかも知れない。

【市民活動チームワーク】

- ・ 指針のたたき台で私たちは「市民活動推進の基本的な考え方」について突っ込んだ議論をしましょう。
- ・ 「支援の原則」が3つ、「支援の対象」、「支援の基本的な6つの方策」「今後の課題」が叩き台として書かれている。私たちはこの中身を少しブラッシュアップした方がよいと思うので、ブラッシュアップの仕方を考えてもらえれば。
- ・ 協働と言われている事業は100以上もある。そこを今度の条例ではどうカバーするのか私はよく分らない。これに基づいた提案事業が出来てくるのか、既にやっている各課の協働事業との住み分けが分らない。
- ・ それは住み分けるのではなくそれらも総合して活動しやすい方向なのかと思っている
- ・ 提案事業はそれとしてあるとするのか、はっきりと定義付けをしていかないと。
- ・ 私たちのNPOも協働事業が前提のような定款で活動をしている。
- ・ 表に出たのがリサイクル活動をやっている3者協働しか見えていない。それ以前に各課がずっとやっている活動はたくさんある。それをこの条例がどうカバーしていくのか、その所がよく分らない。
- ・ そういうのもきちんと「見える化」して、そういう活動がしやすくなるようなことをここに盛り込めるような形にしていくというのが、このチームのやることの1つではないかと思う。
- ・ 私たちが前からやっている協働は、市からこういうことが出来るかと言われて、予算付けるからと言うことでさせてもらっている。一旦契約を結んで続けていくと、この10年間ずっと継続している状況です。最初は1年間で5%くらい予算を切られて、それが毎年毎年で、する範囲も縮まっている。それは皆さん経験があるのではないかな？
- ・ それはシーリングが掛けられるから経験ありますね。
- ・ シーリングを掛けられたら掛けられたでその範囲内で活動するしかない。相当嫌な仕事を100やったのを5%切られたら95%分しかやりませんよとなる。こういう見積もりでよいのか。95%で100%やりなさいというのは非常に難しいこと。
- ・ 今言われていることは大事なことで提案事業だけが協働事業と見られている所があるが、そうではなくて全部を含めての話だと思う。
- ・ そういう方向に（全部を含めた方向）なるように今回やっていくことだと思う。
- ・ 逆に今これを基に作られているものが、NPO法が出来た直後くらいのもものだから、それから15~20年経っているのだから、今の現況を全て情報をまな板の上に出して今後も使える

仕組みを作りたいということだと思ふ。

- ・市民協働ということもまだ組織的にも地域のつながり推進課も市役所の中でもまだ新しい部署。
- ・例えば子どもの事でいうと、子どもの事でやっている以外にも他の部署でやっていることが子どもの事に繋がることもある。そういうのは全庁的にどうなっているか？という照会をかけて、今年度はこういう成果がありましたとまとめていたりする。多分市民協働に関しては、そういうフローがまだ出来ていない。そういうことも含めて市役所も活動しやすく、地域の方々も活動しやすいような仕組みになるように盛り込んでいければいいのかと思ふ。
- ・そこですごく引っかかるのが、協働が最初に来てしまっている。協働が先にくるのではなくて、やはり市民活動推進だから協働をしない市民活動もよいと思ふので、それらも全部含めての話が根本でその上で協働することもあるし、しないこともあるという話だと思ふ。
- ・この考え方は20年くらい前なので、この辺りの考え方自体を今に合わせた形で出た方がよいのではないかと思ふ。
- ・「市民が社会における主役」というのはどうか？多分20年前は正しいと思つて書いたと思ふが。
- ・当たり前過ぎる。もう次の段階に進んでいると思ふ。
- ・行政からの支援の中には協働のように資金的な支援を含んだものと、場所の支援だけでお金は一切支援しないというのもあり、市民活動でいうとそういうものも含んでいる。
- ・行政から全く（お金を）もらわなくてもやっている所はある。
- ・必要とされる場所にきちんと支援されているかどうかだと思ふ。
- ・「市民が社会における主役」というと上から目線に聞こえる。
- ・当時はこれを言わないと市民の立ち位置があいまいだったのだと思ふ。
- ・今となれば今更ですね。
- ・「(仮称) 自分たちのまちなんだから自分たちでなんとかやってみようという想いを共有して行動するための指針」のように今は自分達で出来ることはやるというそういうことを謳った方がよいと思ふ。
- ・仮称を呼んで分かるだろうとせずに、少しずつタイトルにしながら「自分たちのまちなんだから」は何々なのだという説明をし、「やってみよう」はどうしていくという説明したものを項目にしていった方がわかりやすいと思ふ。
- ・「自分たち」とは誰なのかについても市民の中の自分たちなのか、社会の中の自分たちなのか。
- ・「自分たち」の中に行政は入る？ ←入る。
- ・すごく曖昧なのが、行政の責任がどこかに行ってしまうている。皆さんでやってください という感じがすごく嫌だと思ふ。

- ・皆で一緒にやっていきましょう、ということ。
- ・そんな中でたまたま行政でなければ出来ないことがある。役割の違いだけだと思う。
- ・行政が出来ないことを市民がやる。
- ・「自分たち」とは何なのかを言って、それぞれの役割を書いていくのはよいと思う。
- ・「市民が社会における主役」は当たり前過ぎるので、「自分たちでできることはやっいていく」に書き換える。
- ・「大切な市民活動団体の自立とその展開」について。解説での「市民活動団体は組織や運営の面で脆弱です」というのは今でも当てはまる。
- ・10～15年経って一番切実に感じているのは「自立性」。予算とか費用を皆さんどういう風にまかなっているのか。収益事業はほとんどやっていないと思うので。
- ・自立には場所の問題、組織の問題、そうすると厳しい制約が出てくると思う。
- ・自立を助けるということが最終的な目的になってしまってもよいのだろうか？
- ・それはある。目標ではない。
- ・支援する所もあってはいいし、市と一緒にやっていく所があってもいいと思う。
- ・市民の活動の中で期限を区切るような活動もある。例えば100本の樹を植えようなら、100本植えた所で終わってしまう。ずっと続く活動でないものたくさんある。
- ・後は発展的になるものもある。100本を達成したから今度はそれを維持する方への活動をしように活動の内容が少し変化する場合もある。
- ・スタートと自立と絡めて。
- ・課題を解決することが目的であって1つのプロセスとして自立がある。
- ・社会課題解決という本来持っている私たちの目的を解決するように、とすると自立ではない。
- ・「自分たちでなんとかする」というのはまさにそこ。大きく言えば社会課題を解決する。
- ・市民活動は基本的に社会課題解決を目標としている。
- ・これは共通するキーワード。
- ・それを可視化していくというのが私たちの1つの役割。
- ・震災の方を受け入れている自治体の方が動きだしていて、何が必要かという今の課題を大きな紙1枚に書き出した。そうしたら動けるようになった。
- ・それを作りたい。1枚の紙を作って動きやすくなる。動きやすくなるための条例。
- ・「行政による支援の在り方」について。ここがかなり具体的な話。「共に向上し発展する関係を求めて」とはかなり曖昧。そこで曖昧なので「支援の原則」が出ている。
- ・ここでもやはり一番に「自立」が出ている。これを変えた方がよいかもしれない。
- ・これを1番に書く必要があるかということ。
- ・やりたいことをやるための支援。
- ・活動しやすい環境作りが必要。
- ・既にあるものに対しては自立を助ける。無いものは生まれる環境を作る。

- ・市民活動団体の環境を整える。助けをする。
- ・それは既存の通り。
- ・「自立」は少しマズイと思う。これだけではないので「自立」はやめる。
- ・「自立」には自分たちでお金を稼ぎなさいということをして市が指導できるかということと、市がお金を出すというのと2通りあると思う。指導が出来るかどうかの話だと思う。こういう風にするのと儲かるのではないですかというようなアイデアを提供する。場所の提供もある。
- ・それは行政なのか？中間支援組織の役割。
- ・ひょっとしたらその役割は企業かも知れない。
- ・支援はもう行政だけがするものではない時代。
- ・中間支援組織が役割を担うのかもしれない。
- ・それは絶対どこかに入れなければならない。
- ・「支援」という所に引っかかりがある。
- ・これだけ見るとお金の部分への支援しか見えてこない気がする。
- ・「依存する」が前提にあるように見える。
- ・自分たちの自助努力で何とかしていこうというのがそもそもの前提。それでも足りない所を支援してもらおう。
- ・一緒にやっている過程でのこと。
- ・まだ上から目線のような感じがする。
- ・これを作った当時は支援が必要だったのだと思う。
- ・横浜市に市民活動センターがあります。横浜市は370万人もの人がいるから大きいのが1つあり、後は区ごとにある。18区の内、民営化されているのは4区。14区のセンターが直営。区ごとのセンターだと対応できない相談がある場合もある。
- ・逆の方がよい。一番近い所には相談する人が居て、大きい所は管理する人がいるというのがよい。
- ・イメージとしては、市民活動センターは総合病院で、区の支援センターが診療所。
- ・鎌倉は小さいから1つでよい。
- ・その1つが機能していない。
- ・横浜市は支援センター、藤沢市は推進センターという名称。
- ・名称に「支援」がいいのか、「推進」がいいのか、どちらでもよいと思う。
- ・言葉としては「共創」もよいと思う。
- ・市民がセンターに相談に行く時の課題は色々あると思う。「法人になりたい」といった相談はかなり決まった方向性を持っている人。そうではなく何か起きた時にセンターで相談してみようかという種の相談が今はあまり出ていない。相談部会というのがあり、センターが仲介して相談日を決めるという体制が鎌倉にはある。センターに来て事務員がすぐに応えられるような体制ではない。

- ・来られてすぐに解決出来るのが理想的だが。
- ・すぐの回答ではなくても一緒に考えるといったことでもよいと思う。
- ・「支援」ではなく、「繋がり」、「繋がりセンター」
- ・一人の人が対応できる範囲は限られているので、絶対どこかに繋がないと解決はできない。
- ・中間支援組織は NPO や民間団体であるべきなのか、行政であるべきなのか？
- ・当事者として相談者と同じ目線であることが相談しやすさになると思う。
- ・公設民営の施設にいた時、市の職員でしょと言われて、市の職員だったら何なのですかと心の中で思っていた。自分たちの税金で食べているのだろうみたいに言う人もいる。
- ・半官半民だとかいうことが起こるが、私は民間だったので逆に説教したこともあるが、それは民間だから出来ること。
- ・そういう意味では立ち位置の話は前回もした。立ち位置がどこにあるべきかという話をして、行政とのパイプが大事ならば直営でよいのではないかという話も出た。でも前回のスタンスとしては、やはり民間であるべきであろうと。同じ目線で話が出来る方がいいのではないかということになっている。意外と外にいた方が行政の支援がわかったりする。
- ・行政の方は何年か経つといなくなってしまう（異動してしまう）が、外から同じ所をずっと見てみると、こういう時にはあれを使えばよいか、これを使えばよいかということが分かる。
- ・それは色々な市民団体の方が言っているが、行政の支援が使えるようになってから、ものすごく活動がしやすくなった。行政の支援が使える支援組織が必要。
- ・その例えとして、DV がある。昔は行政に窓口がなかったから民間でやらざると得なかったが、その後行政の色々な制度が使えるようになってからすごく支援が楽になったと言われている。
- ・行政組織のスリム化はあると思うが、外から行政の組織に入れられていくようなことも絶対あると思う。中間支援組織も民間であっても役割があると思うので、そこがきちんと出来ていけばよいと思うが、それが出来ていない現状。
- ・役割を明確にした上でそういうものを作っていかなければならないと思う。
- ・作りたい社会のイメージが共有されていて、そこから何が必要なのかという話だとすごくわかりやすい。
- ・絵にして自治町内会と組織を線で繋ぐと、そこにいた自治会会長が「何かしないといけないと思っていたのだけれど、これを見て出来そうだな」と言われた。
- ・そういうワークショップをやりませんか？先ほどもワークショップをやりましょうという話があったので。ヒアリングやワークショップにはいい題材。
- ・「同じ未来を描く」が題材。
- ・「支援」でないのなら、何にするか？「繋がり方」。

- ・「繋がり」だけでもないような気がする。
- ・「共創」は共に創る。
- ・見せ方で同じことでもイメージが変わる。
- ・見せ方もそうだけれど、具体的な何かも必要。
- ・「市役所を新しくしましょう委員会」が広報に出た時に私たちの仲間のお兄ちゃん、今高校1年生が委員に入っている。
- ・もっともっと若い人に参加してもらいたいとつくづく思う。
- ・学校でヒアリングをして意見をキャッチしたい。
- ・「自分のまちなんだから」と言われて何が出来るか？というヒアリング。
- ・NPOセンターで懇談会をやった。その時にワークショップで1分間の自己紹介をするというのがあり、鎌倉に引っ越してきてまだ2、3年目の人が以前は浜辺に出てゴミがると拾って近くのゴミ箱に捨てることが出来たが、今はゴミ箱が全て無くなってしまったので、そういう意欲がなくなってしまったという話を聞いた。
- ・家まで持って帰るまでの気持ちにはなれないと。住みにくいという話も出た。
- ・「共創」もわかりにくい。コンペティション、皆で「競い合う」の意味に取られてしまいかねない。
- ・「支援」は残しておいて、「行政の在り方」を変えてはどうか？
- ・「市民と行政みんな」はどうか。
- ・「相互支援」に変えますか。
- ・やはり「支援」は付くか！「支援」に変わる言葉がほしい。
- ・「相互」とは誰と誰か？それは最初に含んでいる。
- ・ここで造語を作りましょうか。
- ・市民は、自分たちが思いついたら勝手にやればよいが、企業を引っ張り込むということにアイデアがない。
- ・共に歩むで「共歩」(きょうほ)。
- ・「協働」から「総働」へと。皆で汗水たらして働くという意味。
- ・市民が出来ることは身体を使うことだけで、お金は使えない。
- ・鎌倉では使える方もいらっしゃる。
- ・噂ではお金持ちがいっぱいいるということですが。
- ・これからの社会は皆で働く。
- ・高齢者の年齢も変わった。60代は高齢者ではない。
- ・「共歩」の方が意味はわかりやすい。
- ・「みんな」がよい。
- ・「みんな皆走(かいそう)」。響きがよい。
- ・文字を見なくても耳心地がいいのがよい。
- ・この場で盛んに意見交換をしていることを知っているのはここに居る人達だけなので、

議事録公開は必要だと思う。この間のパブコメでも「知らなかった」という意見が非常に多かった。

- ・中学生とかにイメージを与えて言葉を作ってみてください、というのも非常に面白いと思う。今時の言葉で、いい言葉が出てくるかも知れない。
- ・中学生とかは頭が柔らかいから。
- ・作文コンクールみたいにして。
- ・今の所は「共歩」が一番ということでよいか。仮ということで、いつでも変えられる。イメージは、みんなで共に歩んでという感じ。
- ・「在り方として」は、何があるか？
- ・自立を促す、助けるではないと思う。
- ・やりたいことを実現するような社会課題の解決の在り方だと思う。
- ・「なんとかやっけていき方」
- ・実際に活動されている人は、身近な問題は何とかやっけてしまっている。
- ・実際に活動されている人に必要なサポート、活動を広げたいという要望や行政と繋がることでやっていきたいこと、そういうことを繋ぐ。
- ・今は単独の活動になっているが、繋がることは非常に大切。
- ・団体の中でも世代交代があり、団体の役割もある。
- ・共に歩むの在り方が、一緒に悩んで共に歩んでゆく、というのがよい。「共感」。
- ・「一緒に当事者になる」とも言われる。
- ・2番目の「育つ環境を作る」は、生まれやすくするとか、自分で少しおかしいなと思うことがあればすぐに活動できるようにするという意味か？
- ・何とかする1歩を踏み出しやすくする。「なんとかするための1歩」。
- ・サークルはどういう成り立ちで出来てきたのかと思う。私は今所属している所に入った時には、行政が人集めで募集していたから入った。他の団体ではどういう方たちが、始めて人集めをして活動しているのか。それも支援に入るのかどうかだと思う。新陳代謝がないといけない。
- ・一般的にはこれがおかしいと思った人が始めるというのが市民活動。やはりこれが社会課題だと思って始めたら、仲間が集まってきたとか、集めながら一緒にやっていくこともある。
- ・私たちは社協から話が出たのが最初。
- ・後押しがあったわけ。後押しは大事。そうしないと踏み出せなくなる。
- ・つなぎ方として、後押しの仕方。
- ・私の団体は、基本的に精神科医がいてこれではダメだろうと言った人に賛同して集まって始まった。
- ・あの人も興味を持っていたよということで繋がって一緒にやっていく、という支援であっていいのではないか。

- ・子供が不登校でフリースクールを始めた所、実はうちもと言ってあちらこちらから集まってきたという話もある。
- ・やはり誰かが動き出すと集まってくる。きっかけ作り。
- ・きっかけがやりやすいようにということもある。となると情報提供？
- ・市民活動をするための情報。
- ・ありふれているから、編集して加工してその人にわかりやすいようにして届けられるようにしたい。
- ・それがオープンデータ？オープンデータとは何か？
- ・オープンデータは色々な情報を開示するのであって、加工はしてない。
- ・震災の時のボランティアセンターでの情報みたいなイメージ。
- ・それが実際にはNPOセンターにあったり、行政の情報としてあったり、市民の中でもこういうことがしてみたい、というのがあったりなど、見えているものの中でこれだ！と見つけられるようになるとマッチングしやすくなる。
- ・マッチング、コーディネイトもいる。
- ・議事録にしてもこのまま出されても分からない。それをどうするのだろう？
- ・それは今回提案があったところ。政策創造課（NEC コーポレートフェロー）と協力してわかりやすくしてやっていこうということ。
- ・横浜で行政がアンケートやワークショップの結果を3つに分けたら、どこからこういう風に分けられるのかということで市民が怒って、これはどういうアンケートから導き出されたのかという話があった。そういう加工も怖い話なので、オープンデータ的にどうするのかと思う。
- ・オープンデータ自体はそれほど加工しない。行政が持っている例えば障害者の数、子どもの数を見てそれをビジネスに使うとか、市民活動の方がその情報を元にその地域で出来る活動に活かすなど、活動に役立てるために見せていく。
- ・今までは公開されてこなかったデータを見せていくということ。
- ・分りやすく、そこに行けば絶対あるというデータ。
- ・プライバシーに関係ないデータ。
- ・そういうデータを見たいと言う人は自分からデータを取りに行く人だから、データをあまり加工する必要はないと思う。
- ・逆に何かしたいと思っている人への入り口、分りやすい形で物理的なものを提供。
- ・「空き家の問題」もある。耐震化のために200万円だすなども行政の支援。
- ・それでもって高齢者の家にするとか、これからいっぱい空き家が余ってくる。
- ・それが情報として入ると動ける。業界も動ける。商売にもなる。
- ・情報が集まって、情報を使える場が中間組織としてあるべき。
- ・情報を繋いでいける場。
- ・情報はそれぞれ自分たちが使いやすいように加工した方が使いやすいかも知れない。

- ・今私の団体では地図を作っている。公園にどんな遊具あるか、トイレの有無、水場の有無など。
- ・それは行政としてもデータとして持っていないでしょう。
- ・あるにはあるが、その公園の番地が分からないということもある。行ってみないと分からないので、足を使って歩いて調査している。
- ・「原則」の所で1番目は、「なんとかやっていき方」。2番目に「なんとかするための1歩の踏み出し方」については情報で繋いでいく。3番目に、共同性、公開性など、明確性のある支援となっているが、ここは何でしょう？
- ・「明確性」とは何か？
- ・いい加減な所があってはマズイということ？あやふやではないということ？
- ・この辺りは難しいし、オープンデータということになるとまた違って来るかも知れないので、これは置いておく。
- ・「支援」の6つの方策についてはどうか？この時は市民活動団体と市（行政）は結構対立してきた。だから対立するものではないということをきちんと表明していくことが必要ということでこれが出ている。平成9年、20年前の話。
- ・基本的にはこれの延長線上にあるとは思う。その中でわかりやすいものが柱で欲しい。
- ・この時はきちんと一緒にやっていくというのが1番で、場所も、情報も、それから色々な学習や研修も提供する、人材も派遣する、お金も出す。と意見表明した後の5つ、場所、情報、機会、人、金について今はどうか？
- ・人材紹介派遣は今どうなっているのでしょうか？
- ・ここにこれからどういうことを盛り込みたいか。絶対に入れておきたいこと。
- ・資料10頁辺りがリンクしている、人、物、場所を提供すること。支援に変わっていくこと。
- ・施策に繋がるから、これを網羅するようなものにしないといけないと思う。
- ・「学習する機会の提供」がe（「活動環境の整備、市民活動の啓発及び学習機会の提供に関すること」）にあるが、d（「市民、市民活動を行うもの、事業者及び市の交流及び連携の推進に関すること」）は何でしょう？協働のための施策ということか？
- ・ここは市民も行政も企業もみんな一体になってやっていくということ。
- ・協働の施策もそこに入っている。
- ・当事者たちの交流。
- ・f（「市民活動を行うものがその特性を活かせる分野において、市の施策の立案、実施及び評価の過程への参入機会の提供に関すること」）の「新しい評価制度」、「参入の機会」が入ってくるというのは新しい。
- ・敢えてg（「市民活動センター」）を特出ししているのは何故か？
- ・「中間支援組織」をやるなら場所の提供するに入るのではなく、敢えて特出ししている。
- ・すべてをマッチングして、コーディネートしていく存在として「NPOセンター」がある

- ということを改めて記述しているのかも知れない。
- ・先ほどの話の中で、最初にどこにいけばいいのか分からないというのがあったが、それがここなのかもしれない。
 - ・藤沢市の中間支援組織でのお話で、藤沢市では若手の職員を1、2人常に研修させてNPOの仕事のやり方を県が主催するものに費用を出して派遣して、そういう人に戻って事務をやってもらっている。だから事務の方が仕事を全て把握しているので、後は繋がりやすい。決まった事務員がいないと出来ない仕事。
 - ・私は県のアドバイザー相談役をやっている。
 - ・そういう専門職はあってよい。事務員の教育。
 - ・基本的に事務と言ってもそこいるスタッフは全て専門職になると思う。それがないと相談に来られても分からないと思う。
 - ・では専門職が月曜と火曜は居ます、という日程をオープンにしておいてその時に来てもらう。16の専門職の話ではなくて。
 - ・鎌倉では過去にセンターに相談に来られた方に、対応できない内容はただ近隣市等を案内するだけのことをしていたと聞いた。そういう話があったので、鎌倉で受け入れて鎌倉の中で相談に関する案内が出来るようにする必要があると思う。
 - ・基本的に中間支援組織の相談窓口は、最初は全く能力がなくても、伴走、共感するという形で一緒に悩みながらやっているとそこに色々なノウハウがストックされていく。だからそこに専門家を据える必要はなく、一緒に成長していければよいと思う。要は最後までお付き合いする。
 - ・それは受け付けた個人の資質による。
 - ・ある程度市民活動をやった人でないと共感が出来ない。だからある程度自分でも市民活動を別にやっていて、それでそういう人が窓口に入ると共感力は高い。
 - ・だからそういう人を集めて置くということが必要。
 - ・そうするとある程度の経験が必要ということ。
 - ・共感する力だと思う。
 - ・おそらく1回のイベントに参加したくらいでは状況は分からないので、一緒に行ったり、行っていくという仕組みを入れるのはよいかも知れない。
 - ・「鎌倉インターン活用事業」が12頁に載っている。
 - ・「市民団体と若者を繋ぐ」になっているが、若者だけじゃなく、行政の中の人も含んでよいのかも知れない。
 - ・ヒアリングについてはどうか？ワークショップは町内会の人たちと一緒にやりましょうというのが先ほど出ていた。
 - ・これからのまちを創っていくのは若者だから学校などにいくのもよいと思う。
 - ・高校生ならほとんどスマホを持っているので、ネットアンケートとかにも答えてくれやすい。

- ・鯖江の JK 課からステップアップして大学生になったら市民の会になり、市民の会に飛び込んでいって悩みを共有しながら、自分達の新しい会をやっていた。
- ・鎌倉市にも JK 課のように組織できるような学校はいっぱいある。
- ・鎌倉のためにやってくれるかどうかが一番問題ですが。
- ・市民活動はすごくハードルが高いように思われていると思う。年配の方も多いので、自分たちが行く感じが全然持てなかった。その辺りをもう少し楽しみながらやってもいいということを伝えていくともう少し上手くいくのではないかと思う。
- ・若いうちから活動が出来るとまた全く印象が違うと思う。
- ・鎌倉の学校に通っていても、鎌倉市内在住の人はいなかったりするので、学校のある地域に興味がなかったり、鎌倉に対する愛着がないということもある。そこがどうだろうかと思う。
- ・ある高校は市内の人はかなり減っているらしい。今学区がなくなったので広がっているから。
- ・私の団体にいる鎌倉の大学生で、一人暮らしの人は別として地元の学生は、1~2 人しかいない。だからと言って鎌倉に愛着がないかという絶対はない。実際に OB、OG になって鎌倉市役所に勤めたりもしている。大事なのはその中でどういう想いでいるかということ。
- ・逆に鎌倉在住の大学生や若者はどこへ行ってしまふのかが知りたい。
- ・何か始めたけれど仲間が分からないという場合、箱ものがあると相談に来る前にネット上でそこに飛び込んでくると分かるようになる仕組みがあるとよい。
- ・そしてそれがもっとオープンになって、新たにここに当てはめてみようということになれば、飛び込みやすかったり、始めやすかったりするのではないか。
- ・あと常駐してなくても煩わしさが省けたりするのではないかと思う。
- ・最初に、こういうことが分りやすくなりました、というのがあれば、変わったということが分りやすい。
- ・その辺りのことも施策にあるとよい。
- ・ただ指針のまとめを 2 月~5 月でやらないといけない。なのでヒアリングするとしても即やらなくてはいけない。
- ・組織を作ってやっていると間に合わない。
- ・幼稚園のお母さんに聞くのも、地域密着で言いたいことはたくさんあるだろうからいいかも知れない。身近なことをたくさん言っているうちに大きなことが見えてくるかも知れない。
- ・NPO センターにヒアリングをした方がよいのではないかと話がありましたが、どうか？
- ・した方がよい。
- ・NPO センターには 1 回もしたことがないので、待っているはず。
- ・NPO センターに登録されている団体へのヒアリングもあり。

- ・それも大事。
- ・行政がこういうことをしようとしているが、会員の団体の皆さんはどうか？ということ
を、NPO センターを通してやるのはよいと思う。
- ・ここにいる17名だけでやっているという風にとられている。
- ・NPO センターに登録されていない団体にもヒアリングを試みるのもよいと思う。
- ・横浜、東京に通勤している人が多いので日中はいない。
- ・先ほどの幼稚園のお母さんが一番密接。地域のこともよく知っている。
- ・駅前の土日は誰が地元の人か分からない。
- ・(ヒアリング先に) オヤジ会やPTA とかがよいのではないか。
- ・生涯学習センターで色々なセミナーをされているからどうか？ ←あれは貸し教室です。
- ・図書館だと市民の方が利用するのでヒアリングしやすいかも知れない。聞いてくれるか
どうかは別だが。
- ・窓口をいっぱい広げてやった方がよいのかと思う。色々な所でやってそれらをあわせる
と結構な内容になると思う。
- ・何のためのヒアリングなのかを明確にしないと、誰に聞いたらよいのか分からない。
- ・対象によって違ってくる。
- ・基本的には「なんとかやってみよう」という人を増やしたい、ということ。
- ・市民活動をやったことのない人に聞いてみることも必要。
- ・そういう人(市民活動をしたことがない人)が集まる所はどこか？から始まる。
- ・後は市役所の窓口に来て、待っている人にヒアリングをする。
- ・NPO や地域活動の経験がありますか？から聞いて、ご協力くださいとは言えるかも知れ
ない。
- ・そこは鎌倉市民の色々な人が来る場所でもあるからよいと思う。
- ・外で聞かれるより市役所の中の人に聞かれる方が安心かも知れない。
- ・子育てに関して言えば、市でやる無料のイベントに来る人がいる。そういう方はすごく
アンテナを張っていて、お金を出せば出来る、お金を出せば幼稚園に入れるではないか
ら、どうにかして自分たちで何とかしようとしている人達でもあるので、心ある人達。
- ・昼間子育て支援センターに集まってくるお母さんたちは結構情報を持っている。子育て
だけじゃなく、まちづくりや地域の情報も持っている。
- ・市がやっている支援組織などでヒアリングをするとよい意見が集まる。
- ・3/12 の市役所駐車場のイベントでアンケートをするのもよいのではないか。
- ・出店される方は活動をしている人で、お客様は活動をされてない人が多いかも知れない
ので両方の意見が聞ける。
- ・そのイベントに来る人はやはり鎌倉市民が多い？→多い。
- ・これは震災絡みのイベントなので、何かしたい人や、何をしたらいいか分からないけど
したいという人などが集まる。

- ・ こういうイベントに当ててみるのもよい。
- ・ ファミリーが多い。
- ・ ブースを1つ出せばよいのではないか？アンケートブース、繋がるブース。
- ・ 例えばアンケートに答えると防災グッズがもらえるなど。
- ・ これなら出来るのではないか。
- ・ ここにはあまり観光客は来ないだろうから、鎌倉市民が集まる
- ・ ここだと旧鎌倉地区になるので、大船のイベント、大船祭りなどでもするとよいのではないか。
- ・ もう終わってしまったが、豆まきなどもよい機会だったかも知れない。

【市民活動チーム発表】

- ・ NPO と市が共に汗する仕組みづくりにおいて、市民は社会における主役であるということがあったと思うが、これは当たり前のことであり大前提として考えて、それよりもう一つ別のステージで考えた方がよいのではないかということで、今回の話し合いがスタートした。
- ・ 「大切な市民活動団体の自立とその展開」について、20年前ではそれをやらないと社会的にインパクトがなかったということで話を進めた。自立が目的ではなく、その先にある社会的課題を解決していくことが目的である。その1つのプロセスとして市民活動団体の自立があるのではないか、その確認をした。そういう意味で未来の絵を描く、どんな街がいいのか、どんな環境であれば動きやすくなるのか、未来像を描くワークショップが出来ればよいという話が出た。
- ・ 「支援」という言葉が出てくるが、その言葉に変わるいい言葉がないかということで、「繋がる」、「一緒に皆でやっぺいこう」などが出た。「共創」という言葉も最近ではよく使われているが、それではなく「皆で一緒にやっぺいこう」「共に歩む今日」。
- ・ コンサルティングの方の言葉で「協働から共創へ」皆で共に働いていこうという言葉も出たが、この言葉だと一億総活躍社会と同じ感じなので、それより「皆で共に歩こう」という方が鎌倉としては合っているのではないかという話しが出た。
- ・ 「行政による支援の在り方」では、「支援」はお互いに支援し合う「相互支援」だということが出た。自分達のまちなのだから皆で共にやっぺいこうというスタンスが前提としてある。
- ・ 「支援の原則」は2つまでしか挙がらなかったが、この条例の名前に合わせて1つ目が「なんとかやっぺいいき方 つなぎ方」。自分達で何とかやっぺいいこうということ言葉をにした。
- ・ 2つ目は「何とかするための1歩を踏み出す後押し仕方」と言葉を変えてやっぺいいたらどうかと、そこでは情報が非常に大事である。情報もオープンデータの活用など色々言われているが、自分達で入手して自分達が使い易いように加工していくということも1つの方法だけれど、何をやっぺいいか分からないという人にとってみれば、自分たち

で入手してもどう解釈したらよいのか、着手したらよいのかも分からないので、それも編集、加工するような場があるといいのではないか、それは中間支援組織の1つの役割になるのかも知れないという話が出た。

- ・ヒアリングについては、ヒアリング先に関しては市民活動センター、そこに登録している団体、登録はしていないが既に活動しているNPO、自治町内会、市民サポートセンター、一般市民などが出ました。色んな所でヒアリングさせてもらおうと思っても、相手が警戒感をどうしても持つてしまうので、それを解消するためにも1つは市役所のロビーや順番待ちをしている方々に今こういう条例を作ろうとしていることなどを話して、警戒感を緩めて話を伺うのも方法ではないかと。
- ・あと3/12に災害復興支援絡みのイベントがあるので、そういう所でもヒアリングが出来ればよいのではないかという話が出た。
- ・鯖江の事例のJK課会で女子高生向けの取り組みをされているので、まさにこれからの若者、中高生を対象にしたワークショップをして、若者を取り込んでいくのも1つの方法ではないかという話が出た。

【協働チーム発表】

- ・「指針の基本的な考え方」から「協働推進の基本的な考え方」について議論した。どれも大事な再確認であり、そういう考え方が大事であるということばかりであった。
- ・「指針の基本的な考え方」では、分り易いキャッチコピーがあるといいねと。言葉が羅列されているが、これは20年前のもので新しい信頼関係が必要だと、それは大事であるという見方があった。それから今回我々は条例を柔らかく作ったから、指針、方針はがちりとした、ある意味義務化したきちんとやらなければならないという断定を含めた表現でもよいのではないかと。硬さと柔らかさ、メリハリを効かせた表現にしましょうという考えが大事であるということが出てきた。
- ・市民団体から手が上がる仕掛けを作らしよう。逆に市が本当にやりたいことなのかどうかということが分からない。市側が事業としてやりたいこと、やる気が図れないので、行政側が市民に事業を投げる時のレベル差をきちんと示せるものがあるとよいのではないかと。例えば、これはやらなければならないことだから何が何でもお願いしますなのか、市民から良い提案が出てきたら採用しようかの気持ちなのか、そういう行政側の考え方が分かると市民のやる気も変わるし、攻め方も変わる。情報の出し方を考える必要がある。
- ・今泉台の成功例についての話が出た。政策創造課でこの施策をやり、職員3年間付き切りで学校も含めて市民も行政も企業も一緒にやってきてかなり成功している。これは市の中でもかなり珍しい成功例。これをこの後他地域に広げていくようなことがあるのか、その辺りの狙いはどうなのか。地域のつながり推進課で引き受けることにはなっているが、政策創造課でのこの事業はかなり市民を巻き込んで、学校も巻き込んでやって

いくことへの今後の参考になるので、研究の必要がある。でも市の職員、財政関係で分からないことがたくさんあるので、これからどう広げるのかのビジョンについてもきちんと見て行かなければならない。

- ・つまり良い施策をしている所があれば今後どう広げるか、それを誰が引き継いでいくのか、また市が同じだけのお金を掛けられるのか、そうではないと思うから今後はどうしていくのか、市民グループに支援してもらいそこをお願いするという可能性もあるという話が出た。
- ・そういう意味で良い成果の情報を提供することの必要性がすごく大事。それが今の所全然出来ていないような気がするので、そこをきちんと出せることが大事かと思う。一方で市側は優秀な団体に任せようとなると出来る団体にはどんどん任せていけるが、まだ力のない団体には任せられないということになると育てていくということに反するので、例えば75点くらいの団体を育てていくということはどういうことなのかきちんと考える必要がある。
- ・今回「育てる」ということ皆さんから出ていたけれど、育てる事業というものが有り得るのか、それには寛大な空気は必要で、失敗を絶対に許さないという空気も良くない。その辺りをどう見るかが必要。そういう意味で評価、お金の関係、情報の必要性、実験的にやってもいいし、行政と市民の関係性を考えましょう。行政も人材を育てていくという所まで事業のパッケージであるという意識を持ってもらう。非常に大事な部分。
- ・市民との関わりの中で、人材育成のパッケージはなかなかポイントが高い。
- ・「投票行動だけに依存しない自治への参画機会が求められている中で、市民の直接的な参画の機会が求められる世界的動向がある」という文言自体が「他人事」。
- ・世界的なモデルケースを私たちがやるという、それくらいの言葉が必要。
- ・「育てる」とはどういうことかを改めて考えようということで、よいノウハウを伝達したり、情報を活用したりがあると思うが、行政とタッグを組んでいくことでノウハウは自分たちで学ぶことも出来るはず。
- ・行政が市民を育てるのは大変ではないのか、難しいのではないかという話があったが、そこでNPOセンターがしっかりと活躍していく必要がある。成功例や失敗例を共有するために情報を提供してもらい、色んなマッチングと果たしてもらうという意味で中間支援組織の役割は非常に大きい。こちらの協働の話から見てもNPOセンターの役割は大きいということ。相関関係があることは間違いないこと。
- ・いきなり大きな事業が出来る団体はあるものではないので、段階を重ねて実現させていくという緩やかなスペックが必要。実験を重ねて決めていくことも色々あるので、実験の有用性も認め、その話し合いをするステージが今はないのでそういう場を作っていく。
- ・それに対して第三者が審査をしたり評価していくことが必要なので、組織を作ることも、場を作ることも大事。
- ・だから出来る団体をサポート支援から育てるということ。任せる行政というのもマッチ

ングする双方向からエラーを出していくことでよい協働が出来ていく。

- 色々な仕事を協働ですると結構担当課のビジョンが見えない。補助金に振り回されているケースが多い。例えば事業をやったけれど予算が足りないので単年度でお終いということもある。せつかく頑張った市民に続きをさせたい。余地を持たせた予算、財政が必要。広く課をまたいだような柔軟性のある予算を作っておいて市民グループを育てていく。継続的な事業を許容していくことも大切ではないか。
- 市民に出来ることを公開しないと市民も出来ない。市の仕事をきちんと市民も知っているかということが疑問。市民が市の仕事をもっと知り理解すれば、市民にも出来るものがたくさんあるのではないか。
- 市の仕事の情報を公開はしているだろうが、見せ方の工夫が必要ではないか。小さな実績から市民グループにどんどん成長していき、やがては市の事業も受託出来るようになる。そういうステップを踏むにも最初に市の事業にどんなものがあり、どんなことなら手伝えるかを知るための見せ方が必要である。
- 市民団体や活動を促していく仕組みが必要。評価の仕組みも必要。
- 相互提案をした後にお互いの関係が続いている場合もあるので、意外に市民協働が続いている所もなくはない。その時に職員が NPO と接したり、まちの人たちの中に入って行ったりする必要がありそう。
- 市民に実際に委託している事業が結構ある。それをもう少し深堀して調査すべきである。そしてもっと増やせるのではないかという話があった。委託だけでなくイベント開催も無料であっても、交通費のみの支給のレベルのものであっても、謝礼レベルであってもよいから、小さい市民協働から一緒にやれることをきちんと調査すると、それでもよいのだという行政側の新たな発見も出来るようになるそういう仕組みも必要なのではないか。そうすることでお互いに気持ち分かる。そういうコミュニケーションを広げていく必要もあるのではないか。
- 情報をどう開示するか。探したい情報を市民側が取りに行くようではダメ。行政側がこれは市民と一緒にできことではないかと思う情報を積極的に出していく。お互いの立場を考えて情報を出していく。情報の出し方は非常に難しいと思うが、そこをマッチングさせていくことは重要。
- 既存のやり方に縛られていることがある。例えば防災の話をするとうち自分事として捉える。自分事として捉えることが大切で、他人事としているうちはこういうことは絶対に進まない。
- 自分の事として捉えるにはどうしたらよいか。その時に防災関係ならば自分の命に関わることなので自分事として捉える。例えば津波が来て全部無くなってしまっ、ゼロから始めるとなると皆が積極的に自分事として関わるだろう。既存のしがらみに縛られず、条件を抜きにしてゼロからの発想が必要。これも考え方の1つとしては大切。
- バラバラに出てきてはいるが、いずれも非常に納得のいく話である。市民協働を考えて

いく上で非常に大切なキーワードが出てきているので、ここから整理をしていく必要があると思う。

- ・ヒアリングについて。今泉台を成功に導いて4者の参加による事業がどのようにして出来てきたのか。そもそも政策創造課がどうやってこんなにも市民を巻き込んでやっていく事業が出来たのか、そのノウハウや経験、今後の課題、役立つことをヒアリングしてみたい。
- ・市と市民と一緒にやっている事業、どんなに小さい事業でも、無料のイベントでも、謝礼レベルの事業であっても全ての事業のリスト化が必要。そこからもっと出来ませんかということを広げていくためのリサーチが必要。
- ・全部の課の課長や係長を呼んで、どんな協働が出来るか聞いてみてはどうかということが出た。地域のつながり推進課だけではそれぞれの部署に聞くのは聞きにくいこともあるかと思うが、市民のグループと行政が混ざったグループが目的を持って発動して、意見を引き出したり、各課の課長に話を聞くというのもありかと思う。その点は地域のつながり推進課でも上手に活用してもらえればよいのではないかと思う。この検討会のグループが出来ることはまだまだある気がする。

【発表まとめ】

- ・話し合いをしていくことでステップアップしている感がある。整理をしながら確認作業がどんどん出来ているような気がする。市民活動チームからは新しいワードが出てくるというのはかなり創造的だと思う。こういうことは共感を得たりする。
- ・事務局は大変だと思うが、お互いのチームの議事録を凝縮したものと全体を見てもらって、ここからまだ欠けているものを出していけるのではないかと思う。
- ・おそらく文章的にはかなり網羅出来ていると思うので、今度はこれをシェイプアップしながら、整理をして、まだ欠けていること、ぜひしなければならぬこと、を検証しながら進めていくこと。もう少し具体的な事業の話をした方がよいのかもと思う。
- ・何となく方針は出てきているが、具体的に事業でどうやるといった時に例えば育てる手立てとして実際にどんな手立てがあるのかという点と難しい。実現できるかどうかは別としてこういう育成事業があるとか、こういうヒアリングを必ず付けるとか、具体的な施策を挙げてそれを方針で言えているかという検証をするとよいのかと思う。
- ・具体的な案の方が皆さんたくさん出やすいのではないかと思うので、たくさん出してもらって検証していくという作業もできそうな気がする。